

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)		
		法人	区	
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・親自身の育ちとして、自身の子以外の育ちにも目を向けられたり、いずれは地域での担い手として成長できるような力をつけていけるような関わりが必要。職員が利用者との関わりの中でどこまで力を引き出すことができるかが課題である。 ・多様な親子を受け入れるにあたって、瞬時の判断やチームワークなど、拠点のスタッフのスキルアップが求められている。 ・とことこの認知率が9割を超えるのに対して、アピタ「金沢区気軽に子育て相談」の認知率は5割弱とおおよそ半数にとどまっているため、さらに周知していく必要がある。	A	B	
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		A	A	
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		B	A	
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		A	A	
☆さまざまな地域の区民が拠点を利用している		A	B	
評価の理由(法人)				
【お外で遊ぼう実績報告】 ●R4年度 開催回数:34回 / 参加人数:292組(大人299人・子ども315人) ●R5年度 開催回数:47回 / 参加人数:318組(大人326人・子ども348人) ●R6年度 開催回数:45回 / 参加人数:258組(大人270人・子ども281人) ●R7年度 開催回数:47回 / 参加人数:252組(大人262人・子ども272人) 【地域deとことこ】 令和3年度からアピタ「金沢区気軽に子育て相談」に替えて実施(ネットワーク事業で実績報告)。 【ひろばイベント実績・R7年度】 ・音楽大好き!(239組)・はじめてのとことこ(35組)・タッチケア<ZOOM>185組<2組>・プレママDAY(6人)・みんなdeストレッチ(91人)・わらべうたであそびましょう(120組)・多文化ママ交流会(14組)・Enjoy English(4.5月のみ・21組)・パパDAY(112組)・みんなどうしてる?!(45組) 【地域子育て支援事業アンケート・R5年度】 ・「とことこ」を知っていますか。 ①知っており利用したことがある52.6% ②知っており、これから利用する予定がある5.6% ③知っているが利用する予定はない34.1% ④知らない7.8% ・「とことこ」を利用しない理由を教えてください。 ①住んでいるところから遠い37.1% ②連れていくのが大変28.6% ③他の子育て支援施設等を利用中25.4% ④どんな施設か知らない14.5% ⑤利用する必要性を感じない11.7% ⑥子育ての仲間をうまく作れるか不安6.9% ・「とことこ」の利用目的は何ですか。 ①子どもを遊ばせるため90.7% ②子育ての息抜きのため32.4% ③子育てに役立つ情報を入手するため32.4% ④親同士の交流のため26.0% ⑤イベントに参加するため25.3% ・スタッフから、ひろばを安心して利用できる関わりがあったか ①関わりがあった77.4% ②どちらかといえば関わりがあった19.0% ③どちらかといえば関わりがなかった3.3% ④関わりがなかった0.3% ・「とことこ」を利用した満足度を教えてください。(「満足」「どちらかといえば満足」数値) ①こどもが楽しく遊べた97.6% ②子育ての息抜きができた92.9% ③子育ての仲間ができた73.7% ④こどもの成長の見通しがつくようになった88.4% ⑤子育ての不安や悩みの解消につながった90.1%				

①【利用者の状況に応じた丁寧な関わりによる雰囲気づくり】【利用者同士のつながりを意識した関わり】

- ・特に初来館者に対し、声かけや丁寧な対応により緊張感がほぐれていき、安心して過ごせるように関わる等、居場所として感じられるように心がけている。「はじめてのことこ」「タッチケア」は初めて拠点を利用するきっかけとなった。参加者同士が知り合いになり、次回の来館につながっている。
- ・日本語が話せない外国籍の親子の来館に備え、ひろばの案内や主要な掲示物に英語表記を追記し、コミュニケーションツールの一つとして、スマートフォンの翻訳アプリを活用している。また、該当の言語が話せる利用者と繋ぐなど、安心して過ごしていただけるよう工夫をしている。
- ・職員は来館者との距離感を大切に、ひろば利用者にとって居心地の良い場になるよう、職員が利用者同士をさりげなくつないでいる。久々の来館であったり、会話や様子から積極的な関わりが必要と思われる親子には、受付からひろば職員へつなぎ積極的に声掛けをするなど、ケースバイケースの関わりをしている。

②【多様性を認め合うひろば・一方で対象を絞った居場所づくり】

- ・妊娠期、0歳～の親子、父親、祖父母世代、学生、外国籍の方、多様な方々が集う場所であることを常に意識した対応をしている。
- ・多様な方が集う場所としてのきっかけやつながりづくりを目的として、テーマ別語り合いイベントを開催している。（はじめてのしたことこ、多胎ママ交流会、イヤイヤ期の子育てについて語ろう、多文化ママ交流会）R7以降は、語り合いのテーマについて利用者からの声を反映し、よりニーズに近い内容となっている。
- ・「発達に不安のあるママ同士で話しましょう」、「ふわふわ（個別支援学級に通うママ同士で話しましょう）」「にこまるの会（口唇口蓋裂のお子様を持つ保護者の方々同士で話をする会）」などは拠点休館日や研修室を利用する事で、通常のひろばには行きづらさを感じている親子の居場所になっている。

R6年度より、「発達に不安のあるママ同士で話しましょう」は「ぼかぼかひろば」へリニューアルし、語り合いに参加しなくても発達か気になるお子さんと一緒に過ごせるひろばとして定着した。

- ・休館日(日曜日)を活用したパパDAYは、トライアル期間を経て、R5年度より月1回開催している。父と子で過ごす時間・母がひとりになれる時間が確保でき、父親同士の交流のきっかけとなっている。また、年間を通して父親のひろば利用が増加した。(R4年度：331組⇒R5年度799組/前年度から2.4倍増)
- ・ひとり親への支援として、「フードパントリー」、「こども食堂」の情報提供や「オムツバンク」を開始した。情報提供だけでなく、子育てパートナー、子育て応援リーダーを通じた地域との関係性から、該当者が利用できるように橋渡しを行った。今後は、周知時期にあわせ、ひとり親に向けた取組を検討していく。
- ・ひろばの情報について、子どもの視界に入らないよう掲示の高さを工夫したり、発達関連の情報に関しては他の情報に紛れさせたり、DVやひとり親の支援などは個室トイレに案内を置く等、配慮している。

③【ひろば利用者からのご意見やとことこポストをもとに利用者の声やニーズを区と共有し、ひろば運営に反映】

- ・利用者からの声に対して、日々の振り返りで共有するとともに定例会で議題に取り上げ、職員一人ひとりが利用者対応を振り返り、改善点について考える時間を設けた。
- ・とことこポストに届けられた声や利用者ニーズ、ひろばで受けた相談に関しては、いったん職員間で共有し、協議をした上で答えを見いだしている。回答に関しては、ひろばへの掲示やとことこ通信に掲載し、広く周知している。
- ・養育者のニーズに合わせ、コーナーごとに過ごす子どもの月齢に合わせた情報を掲示・配架している。

④【オープンスペースの利点を活かした成長の見通しの場】【子ども自身の可能性を引き出す場】

- ・赤ちゃんコーナーでは安全面を最優先にし、こどもの月齢・年齢に応じたひろばのゾーニングをすることにより、子どもたちがゆつくり遊び、保護者もゆったり過ごせる空間づくりを行った。
- ・利用者同士で育児の情報交換ができるよう、職員がつなぎ役となって関わっている。心配な事はネット検索だけでなく、「スタッフに聞いてね。」と促している。専門家相談の先生から頂いた情報をひろばに掲載をしている。(ことばのビル・母乳を飲ませる抱き方・トイレトレーニング、乳幼児健診の資料)
- ・子どもにとって居心地の良い場所になるような視点での関わりを意識している。特に活発で動きの早い子に対し、職員間で対応を共有し、連携しながら少し手厚く関わっている。様々な人との関わりの中で、子ども自身が著しく成長する場面も見られた。
- ・夏休み期間や土曜日など幼児の来館が多い時には、レイアウトを変更し年齢特性にあわせた過ごし方ができるように工夫を行った。
- ・年齢の高い子向けのおもちゃは、パーツが細かいものもあるため安全面を考慮して通常はひろばには出してないが、写真を掲示し希望に応じて随時遊んでいただけるよう工夫をしている。

【テーマ別交流会が養育者同士の情報交換・課題解決の場へ】

- ・テーマ別交流会を通じて参加者同士がつながり、その後も来所時にお話したり、情報交換している様子が日常的にみられるようになった。特に多文化ママ交流会では、その時に得た情報がきっかけで、実際に日本語教室に通ったり、イベントに参加される方がいた。

★【商業施設「アピタ」から「地域deとことこ」への転換】

- ・「とことこ」まで来られない方や、拠点との接点がなかった方に向けて、区内商業施設(アピタ金沢文庫店)に週3回職員が出張していたが、コロナ禍の影響で「アピタこどものあそびば」が閉鎖となったため、代替として、地域の自治会を会場にした子育てサロンに職員が出張する「地域deとことこ」を開始した。子育て相談、情報提供、参加者同士のつながり等、地域の居場所として定着している。ひろば内には、各開催場所の立地をイメージしやすいように「地域deとことこMAP」を掲示した。

【外遊びの大切さを伝え続ける「お外であそぼう」】

- ・乳幼児期の外遊びの大切さを区をあげて伝え続けている。「お外で遊ぼう」では、区内10か所、50回、公園に公園サポーターが出向き、外遊びのサポートをしている。公園サポーターがいることでその日を目指して参加する親子もあり、外遊びを通じた交流の場になっている。

【オンラインを活用した支援】

- ・コロナ禍で始まったオンラインを活用した支援は継続して行っている。タッチケア、みんなdeストレッチ、ピアサポート(にこまるの会)、はじめまして幼稚園(幼稚園説明会)など、来所困難な方に向けての一助となっている。

【安心・安全なひろばであるために】

- 月に一度、ひろばで「防災訓練」を行った。テーマを「地震・火災」と「不審者」とし、月替わりで曜日や時間帯を変えて実施。職員と利用者で有事の避難方法を確認する機会となっている。

評価の理由(区)

- ①安全面を考慮した環境整備や温かな雰囲気づくりについて、拠点は独自に工夫できているため、必要に応じて拠点との連絡会にて対応状況を共有・確認し、改善に向けた検討を拠点と一緒にすることができた。
- ・福祉保健課から、母親の乳がん検診受診勧奨や受動喫煙防止に関する啓発など健康教育を実施したり啓発の場を設けたほか、拠点スタッフに対して感染症対策のための講話を行い、拠点利用者の健康促進の支援とスタッフの対応力向上を目指し、利用者が安心して拠点で過ごせるように支援した。
 - ・拠点との定例会にて利用者からの意見(掲示物が古くなっている、など)を共有し対応を検討した。
 - ・親子が拠点につながりやすくなるために、母子健康手帳面接時や両親教室などの妊娠期からの関わりや、各種産後訪問、乳幼児健診や保育・教育コンシェルジュ相談など子育て中の関わりの中で、リーフレットやキラキラMAPを用いて拠点を案内した。また、育児教室や両親教室では拠点スタッフを招き、拠点をPRすることができた。
- ②「とことこリーフレット」を生活支援課や外国語版を国際交流ラウンジに配架依頼したり各課職員に対して拠点の説明をし、当該課の利用者にも周知してもらうことで、ひとり親や貧困層、外国籍の方へ、周知の手法を増やすことができた。
- ・多胎児や外国籍の養育者、発達に不安のある児の養育者、ひとり親などに対し、乳幼児健診や保健師などによるフォローの場面に拠点や交流会を紹介したほか、支援が必要な親子に保健師などが同行することで拠点の利用につながった。
 - ・個別心理相談や親子教室で「ぼかぼかひろば」を、ひとり親やワンオペの方に向けて「ゆうがたほっとひろば」を案内し、開館時間内に利用できない・利用しづらい方へ拠点利用を促した。
- ③区が把握したニーズを定例会などで拠点と共有したり、定例会の内容を地区担当保健師と共有し対応方法を検討するなど、ニーズの把握やニーズを受けた対応に向け拠点を支援することができた。
- ・ひろばの掲示物について、最新版へ更新するため、チラシや資料を提供した。
 - ・健やか子育て連絡会の地区別交流会を開催し、各地域の現状の確認やニーズの把握と共有を拠点とともにに行った。
- ④定例会の際、こどもの育ちや安全面に考慮した配置や遊具の使用であるか確認した。警察署とともに、防災・防犯対策について確認し、助言をもらった。
- ・「金沢八っさく(子育て練習室)」を拠点とともに実施することで、前向きな子育てを練習する場を提供した。
 - ★「地域deとことこ」や「お外で遊ぼう」の開催を乳幼児健診、育児教室、母子訪問などの区の事業や区民祭り「いきいきフェスタ」で周知し、「お外で遊ぼう」「ゆうがたほっとひろば」「とことこバDAY」デジタルサイネージに掲載することで認知度の向上を図った。
 - ・健やか子育て連絡会や公私合同園長会にて、「お外で遊ぼう」の秋のキャンペーンの開催場所として協力を呼びかける場を設けるなど、開催の支援をした。
 - ・「お外で遊ぼう」の開催にあたり、資源循環局と公園利用の際のゴミ収集について調整し、公園を安心して安全に利用できるよう支援した。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・利用者の状況、ペースを尊重し丁寧に関わる事で、職員と利用者との信頼関係を築くことができています。特に利用者との距離感を大切にし、ひろば利用者にとって居心地の良い場になるよう、職員が利用者同士をさりげなくつないでいる。「はじめてのとことこ」「タッチケア」は、拠点を初めて利用するきっかけとなっており、参加者同士が知り合いになり、2回目以降の来館につながっている。

・多様性を認め合うひろばとなるよう意識した運営を行っている。「みんなが同じ空間」にいられる事を大切にしている一方で、休館日や閉館後を利用した「個別性」も大切にしている。「発達に気になる親子」「父親限定」「ひとり親」「ワンオペ育児をしている方」と銘打つことで、通常のひろばには行きづらさを感じている方の居場所となっている。

・「地域deとことこ」や「お外で遊ぼう」を実施することで、拠点に来られない方々に向けて、相談対応や情報提供を行っている。拠点の認知度も上がり、目指して来てくれる方も増えてきた。地域の居場所として定着しつつある。

(課題)

・来館者の低年齢化(0～2才児86%)、利用期間の短期化に伴い、3歳以上の親子が利用を遠慮したり、利用者同士の関係性が深まらないなどの課題に対応していく。

・多様な親子を受け入れるにあたり、利用者対応は一律ではないため、職員一人一人の感性を磨いていくことやチーム力をつけていくことが求められる。

・ひとり親や貧困層、外国籍の方の利用につながるよう、生活支援課や国際交流ラウンジとの連携を継続していく。拠点に行きやすいように、拠点がどのような場所かを他課の担当者へ伝え続けるさりげない支援と、職員からの直接的な支援の両輪を継続していく。

振り返りの視点

- ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
- イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
- ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
- エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
- オ 把握されたニーズを区関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
- キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気付き、学ぶ機会を提供する場となっているか。
- ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A～D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	・社会や子育てに関する現状の変化に対応できるよう、常日頃から最新の子育ての情報を職員が共有しておく必要がある。 ・養育者や子育てに関する社会の状況が変化することで、職員の相談の姿勢として、傾聴、共感だけではなく対応の必要性を感じる。 ・利用者アンケートで「不安や悩みが解消に繋がった」と回答した人が72%と高い数値であるが、一方で4人に1人は解消につながっていないと考えられるため、そうした利用者をどう把握し、継続支援をしていくのが課題である。	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができています。		A	A
評価の理由(法人)			
【相談件数】 R4年度 ひろば相談:1,612件 専門相談 163件(助産師:55件・保育・教育コンシェルジュ:55件・栄養士:33件・発達:20件) *コロナ禍の為、専門相談は予約制 R5年度 ひろば相談:1,595件 専門相談204件(助産師:71件・保育・教育コンシェルジュ:71件・栄養士:41件・発達:21件) R6年度 ひろば相談:1,996件 専門相談190件(・助産師相談(11回 93件)・栄養士相談(11回 46件)・保育・教育コンシェルジュ相談(11回 51件) R7年度 ひろば相談:2,184件 専門相談223件:栄養士相談(11回 49件)・助産師相談(11回 103件)・保育・教育コンシェルジュ相談(12回 71件) 【ピアサポート】 R4年度 「発達に不安のあるママ同士で話しましょう」:95人・「ふわふわ(個別支援学級の会)」:24人・「食物アレルギーについて話しましょう」:15組・「せんさいさん(HSC・HSPの会)」:23人・「にこま～るの会(口唇口蓋裂の会)」:15人 R5年度 「発達に不安のあるママ同士で話しましょう」:88人・「ふわふわ(個別支援学級の会)」:12人・「食物アレルギーについて話しましょう」:19組・「せんさいさん(HSC・HSPの会)」:15人・「にこま～るの会(口唇口蓋裂の会)」:12人 R6年度・ぽかぽかひろば⇒休館日を活用した「発達が気になる親子のひろば」(12回 116組)・口唇口蓋裂の会(にこま～るの会)(4回12人) R7年度・ぽかぽかひろば⇒休館日を活用した「発達が気になる親子のひろば」(12回 57人)・口唇口蓋裂の会(にこま～るの会)(4回12人) 【地域子育て支援事業アンケート・R5年度】 ・「とことこ」を利用して「子育ての不安や悩みの解消につながったかどうか」満足度を教えてください。 ①満足41.2% ②どちらかといえば満足48.9% ③どちらかといえば不満8.5% ④不満1.4%			
①【利用者との信頼関係に基づく相談対応】 ・ひろば職員は利用者の利用頻度や来所した時の様子を察しながら距離感を大切に、信頼関係を築くように努めている。ひろばで相談を受けた際は、利用者に寄り添い傾聴の姿勢で対応するよう心がけている。 ・子育てに関する不安や困り事の相談を受けた際は、職員や他の利用者同士の対話によって不安が軽減できるよう努めている。 ・専門家による相談日を設けることで養育者の不安の軽減及び職員の相談対応スキルアップにつながった。特に、「子の発達に関する相談日」は職員カンファレンスを行い、相談者の対応について共有し、ひろばでの対応に活かしている。 【多様な利用者に対応できるよう日々の振り返りでの情報共有と定期的な職員研修の実施】 ・日々の振り返りを工夫し、子育てサポートシステム事業・利用者支援事業・子育て応援リーダーの活動についてできる限り共有し、職員が他事業について意識できるようにしている。また、ひろばでの対応について、不安や迷いが生じた際に、振り返りで確認できるような雰囲気づくりを心掛けている。スタッフ会では「利用者対応やスタッフの立ち位置など」について話し合いを行った。日頃感じていた疑問や改善点等を共有したことで、個々の気づきにつながった。 ・同法人が運営している、中区地域子育て支援拠点「のんびりんこ」との合同研修を定期的に開催。研修テーマに関しては振り返りの様子や親と子のつどいの広場との協議により決定し、日々の業務に活かしている。 ②【拠点の役割(つなぐ)を踏まえた関係機関との連携】 ・ひろば利用者に関して、継続的に見守りが必要だと思われる親子について相談共有会議にあげ、区の関わりがあるか、ひろばでの対応について確認し、スタッフ会では対応についての共有をしている。専門的な対応が必要と判断したケースについては、パートナー案件として対応している。区や専門機関につながった後も必要に応じ、対応を確認しながら見守りを継続している。 ・ひろばでの相談対応に活かせるよう、定期的に区の事業や関係機関についての研修を実施し、職員の共通理解を図った。特に乳幼児健診の講話では、健診の意義について再確認し、ひろばで健診に対する不安をもらす母に対してさりげなく伝えている。 ・関係機関(主任児童委員、幼稚園園長会、保育園園長会等)には定期的に参加し、顔の見える関係を継続している。 【親同士のピアサポートによる対応】 ・当事者同士の支え合いについて、定期的に開催することで認知されてきている。「発達に不安のあるママ同士で話しましょう」は2歳前後の母達が参加し、普段のひろば利用時では話せない「子の発達についてのお話」を会の中でできることで、母の安心につながっている。同じ境遇にある養育者同士が気持ち共感しあえる大切な場所となっている。R6年度より、「発達に不安のあるママ同士で話しましょう」は「ぽかぽかひろば」にリニューアルをした。発達が気になる親子、普段のひろばでは過ごしづらさを感じている親子の居場所とピアサポートの場として定着。定期的に療育センターワーカーによる講話や、臨床発達心理士に協力頂き、参加者のニーズに合わせた対応が可能になっている。また、新規事業として「ぽかぽかトークルーム」(特別支援教育士の先生をお招きしたお話し会)を開催。発達の課題を抱え、集団に馴染めないお子さんや小学校進学に向けた養育者の不安の軽減につながっている。			

評価の理由(区)
①・毎月の定例会や相談共有会議にて、拠点での相談や対応状況を共有し、必要時助言や情報提供をした。 ・定例会の場にて健康に関する講話(子育て世代の健康づくり、乳幼児健診や感染症予防)、児童虐待予防に関する講話を行い、拠点スタッフの相談対応のスキルアップを支援した。 ・母子健康手帳交付時、両親教室、赤ちゃん教室(育児教室)や母子訪問などの機会を利用し、拠点の相談機能について周知を行っている。 ・乳幼児健診でも配布している子育てのポイントに関するチラシを拠点へ共有し、都度更新している。拠点に配架することで来所者が必要な情報を得たり、拠点スタッフが相談を受けた際に活用できるよう支援した。 ②・拠点と区の各々が把握した継続支援が必要な親子に対し、相談共有会議や電話等の個別相談により対応状況や方針のすり合わせを行い、助言や見守りのポイントを共有したり、関係機関につなぐなど、連携して親子を支援することができた。 ・拠点から上がってくる対象者の支援状況について、相談共有会議前に地区担当保健師に確認してから会議に臨むことで、会議の内容をより充実させることができた。また、相談共有会議後に会議の内容を共有し、必要に応じて看護職協議等の議題にあげることで対応方法について検討し、支援している。また、会議の場以外でも拠点から相談があった際には、地区担当保健師を中心にスピーディに対応することができた。

拠点事業としての成果と課題
(成果) ・利用者との日常的な関わりの中で、個々への距離感を大切にしながら相談対応に努めた。相談をきっかけに他の利用者同士をつなぐ場合もあり、職員や他の利用者同士の対話によって不安が軽減できた。 ・区との相談共有を通じ、区のとらえや対応に関するポイントを伝えていただき、ひろば対応に活かすことができている。 ・ひろば職員の役割や専門相談・パートナーにつなぐタイミングなどをスタッフ会で再度確認し、個々の気づきにつながっている。 ・ピアサポートは同じ境遇にある養育者同士が気持ち共感しあえる大切な場所となっている。特に、にこま〜るの会(口唇口蓋裂のお子さんの親の会)はコロナ禍から開始したハイブリッド形式により、遠方の方との情報交換ができるようになった。 ・法人間協働により、特別支援教育士の先生をお招きしたお話し会を開催。発達課題を抱え、集団に馴染めないお子さんや小学校進学に向けた養育者の不安の軽減につながっている。 (課題) ・社会や子育てに関する現状の変化に対応できるよう、常日頃から最新の子育ての情報を職員が共有しておく必要がある。 ・ピアサポートに関しては、会の立ち上げメンバー自身の状況が変わり、会の継続が厳しい状況になった。過度な負担がかからないように開催方法含め、相談しながら進めていく必要がある。

振り返りの視点 ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。 イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。 ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。 エ 各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。 オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、適切に対応しているか。 カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。
--

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A～D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	・利用者による情報提供の仕組みづくりは着手しているが、利用を促す工夫が必要。 ・養育者等へ同じ情報を伝えられるよう、区と拠点で共有していく必要がある。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。		A	B
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。		B	B
評価の理由(法人)			
【とことこホームページビュー数の推移】 R4年度 81,348件 / R5年度 113,416件 / R6年度123,422件 / R7年度 129,364件 ●ブログ閲覧数 R4年度 22,668 件 /R5年度 29,990 件 /R6年度 27,767件 / R7年度 29,860件 【主なホームページリンク先】 区役所の子育て情報／親と子のつどいのひろば(5か所)／金沢中部地区／地域ケアプラザ(10か所)／地区センター(5か所)／コミュニティハウス(10か所)／りんごの森/国際交流ラウンジ/発達支援つながりワーク「てくてく」(3か所)／金沢区ママ/スポーツセンター/スポーツ会館(2か所)／金沢動物園/子育てタクシー／多文化ママのお話会(二次元コード) 【LINE】毎週金曜日配信。地域イベント情報などの依頼に応じて臨時配信。 ●LINE登録者数 R4年3月末日1,030人 R5年3月末日1,339人 R6年3月末日1,603件 R7年3月末日1,876件 【Instagram(R7年度以降)】 ●フォロワー数 643人 ●閲覧数 270,632件 【とことこ通信】2か月に1回発行。4,500部印刷、約150か所に郵送や手渡しにて配架。R7年度より紙面を刷新。/配架場所-区内保育園、区内幼稚園、区内医療機関、区内地域ケアプラザ、区内地区センター、区内親と子のつどいの広場、金沢区役所、横浜市子ども青少年局、J:COM、町内会、子育て支援者、区内商業施設、主任児童委員、児童発達支援、金沢図書館、横浜子育て情報スポット「あのね」、タウンニュース、はまかぜ、子育てサロン、コミュニティサロン、ふれあいカフェ、横浜市緑の協会、リンク トゥ ミヤンマー。 【地域子育て支援事業アンケート・H30年度・R5年度】 ・「とことこ」から提供される情報で役立っているものは何ですか。 【H30年】①とことこ通信55.9% ②とことこひろば内掲示45.5% ③とことこHP21.7% ④特にない7.7% ⑤メルマガ0.7% 【R5年】①とことこ通信50% ②とことこHPイベントカレンダー35.9% ③LINEメッセージ32.1% ④とことこひろば内掲示26.6% ⑤ブログ8.3%			
①【とことこHP(ブログ含む)、LINE等、SNSを活用した情報発信の充実】 ・HPでは、情報発信のツールとしてイベントカレンダーを活用。地域や保育園等からの掲載依頼も増えており、それに伴い閲覧数も増加。また、イベントの様子や地域を訪問した様子についてはブログで頻繁に発信した。 LINEでは、週に1度の定期的な配信の他、「かなざわ子育てイベントカレンダー」についても都度単発で配信し、HP閲覧を促している。また、地域から周知依頼のあったイベントはタイムリーに配信している。 ・R4年度にHPを一部改修。職員が操作できる部分を増やしたことでトップページの活用が進み、タイミングよく最新情報を案内できている。 ・R6年4月～横浜市地域子育て支援拠点共通WEBサイト設置に伴い、ひろば入退館システムや横浜子育てサポートシステム会員登録等の変更について、とことこ通信、HPやLINEで必要な情報発信を行った。事前に情報提供をしたことで変更にもなう大きな混乱を避けることができた。 ・利用者の情報入手方法の変化に伴い、R6年3月よりInstagramを開設し、写真や動画を投稿し、とことこ事業の周知の一助となっている。また、HPIに関して、トップページの掲載内容やレイアウトを整理し、ハンバーガーメニューにする等、一部未実施だった箇所をスマートフォン対応に改善した。 ・ 【地域とのネットワークによる旬な情報収集と提供】 ・「地域deとことこ」への職員の出張や子育て応援リーダーが地域へ出向いた際には、「とことこ」の情報に加え近隣の情報も案内した。また、地域情報をとことこひろばで提供する等、ネットワークを活用した情報提供を行っている。 ・子育て応援リーダーが訪問したサロンや保育園の子育て支援の様子をブログに掲載。足を運ばなくても地域や子育ての情報が得られるよう、情報配信を強化した。LINEからもブログ閲覧が可能になり、より親しみやすい形で情報を届けることが出来ている。			
②【様々な会議体・媒体を通じた拠点の情報収集・提供事業についてPR】 ・主任児童委員定例会、幼稚園園長会、公私合同園長会、公園サポーター定例会、健やか子育て連絡会で、拠点のHPやLINEで情報発信できることについて情報提供した結果、地域や保育園・幼稚園からの周知依頼が増えた。金沢シーサイドFMにゲスト出演し、「とことこ事業」についてPRを行った。子育て世代ではない地域の皆さまに拠点を知っていただく機会となった。 ・地域や関係機関の方が活用できる情報発信ツール（ひろばへの掲示・HPかなざわ子育てイベントカレンダー・LINE）の案内を掲載した「とことこからの情報発信3選」チラシを作成。とことこからの情報収集・発信についてPRに活用している。			
③【利用者が情報発信の担い手になるしかけづくり】 ・「利用者掲示板」(※1)、「ロコミファイル」(※2)、「ゆずりますコーナー」(※3)等、利用者が情報発信、間接的に繋がれるしかけづくりを行った。 (※1)テーマごとに利用者のアイデアを掲示。 (※2)ひろば相談で多い、「地域の病院情報」「離乳食のアイデアレシピ」「幼稚園ロコミ情報」等について、利用者からの情報をファイリング。 (※3)ご家庭で不要になった育児グッズ等を他の利用者に譲れるよう掲示。特に、「利用者掲示板」では、「この夏の思い出」をテーマに設定。文字ではなく写真を掲示する形としたことで、今まで投稿したことが無かった養育者からのアプローチが増えた。また、R7年下期からは、「利用者掲示板」の形態を変え、「気軽にやりとり」・「ゆずります」・「ロコミ」の3つが同じスペースで常時出来るスタイルにした。職員も必要に応じて仲介しつつ、活用されている。 ・「とことこサークルWEEK」を開催。サークルの活動内容に関する掲示を追加し、利用者自身でPRできる良い機会となった。			

評価の理由(区)
①・区内の子育て情報が集約された「キラキラMAP」の編集と発行を拠点と協働で行った。地域ケアプラザ、保育園・幼稚園、地区センター、親と子のつどいの広場など関係各所に配布したほか、乳幼児健診やこんには赤ちゃん訪問時や転入者に配布するなど、地域の子育て情報が必要な家庭に届くように工夫している。 ・拠点の発行物について、発行前に区でも校正し、正確な情報を発信できるよう内容の共有・確認をした。 ・拠点事業を担当者以外も把握できるよう、係内と必要時間連部署へ事業やイベントについて周知した。 ・拠点の職員が地域で情報を得られるよう、地域や関係機関の会議への参加を調整した。 ・「養育者の健康WEEK」の共催をはじめ、健康づくりや感染症に関する情報など、養育者に役立つ情報を提供した。また、拠点職員に区の事業についての講話を行った。 ・保育・教育コンシェルジュが月1回「とことこ」訪問日設けて、養育者に対し保育園の情報提供や、相談を受けている。 ・ひろばの掲示物について、年度初めに最新情報に更新できるように情報提供しているほか、市の事業ちらしについても適宜、掲示や配架を依頼している。 ・キラキラMAPのウェブサイト移行に向けて、区HP・拠点HP・パマトコで発信する情報の整理を行った。 ②こんには赤ちゃん訪問、母子訪問、両親教室、乳幼児健診、育児教室、母子健康手帳交付時等、様々な機会に拠点で情報収集ができること、子育てパートナー・子育て応援リーダーの役割や機能について周知した。区役所窓口、健診会場に「とことこ通信」を配架するとともに、こんには赤ちゃん訪問で配布している。 ③・とことこHP「イベントカレンダー」やとことこ公式LINEで情報発信ができる仕組みについて、健やか子育て連絡会の地区別交流会等で紹介し、養育者や担い手へ活動内容をPRできることを周知した。 ・金沢区内の子育て支援団体の情報発信時に「#金沢っこ」をつけることを健やか子育て連絡会全体会で決議し、区内の子育て情報の連携を促し、周知力アップを目指すことにした。 ・デジタルサイネージを用いて「お外で遊ぼう」「金沢八っさく(子育て練習室)」や毎月の「ボランティア説明会」の案内を掲載した。 ・子育て応援サイト「パマトコ」でも「プレパパプレママ教室」や「金沢八っさく(子育て練習室)」、イベント情報を掲載するようにした。

拠点事業としての成果と課題
(成果) ・ネットワークを活用し、「情報収集・提供」事業について広く認知されてきたことで、拠点に情報が集約され、タイムリーな配信ができています。 ・ホームページやLINE等の手軽な情報提供と、紙媒体をもとにしたアナログの手法の両輪で周知が行えている。 ・Instagramを開始したことで、拠点の様子をリアルタイムで発信できている。 ・「利用者掲示板」のテーマ設定を工夫したことで、利用者が情報発信するハードルが下がり、アプローチが増えた。 (課題) ・子育てに関する情報発信の一元化と効率化に向け、拠点HP、区HP、パマトコで発信する情報の整理を行い、閲覧者増加に取り組む。また、拠点と区の役割分担を明確にしたうえで情報の集約や発信を進めるとともに、利用者目線に立ってアプリの改善について所管局へ働きかけていく必要がある。

振り返りの視点
ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。 イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。 ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。 エ ネットワークを活かして情報を収集し、を養育者や担い手に提供しているか。 オ 様々な子育て支援情報を拠点が集め、提供していることを広く区民に周知しているか。 カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。 キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A～D)		
		法人	区	
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	・拠点と地域や関係機関との双方向のネットワークを深めるとともに、地域や関係機関の方が拠点事業の発信者となってもらえるような取り組みを構築していく。	A	A	
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。		A	A	
評価の理由(法人)				
【会議出席】主任児童委員会定例会、公私合同園長会、幼稚園園長会、要保護児童対策連絡会、分娩取り扱い施設連絡会、障がい者地域自立支援協議会 【健やか子育て連絡会構成メンバー】民生委員、主任児童委員、保健活動推進員、子育て支援者、幼稚園、保育園、地域ケアプラザ、親と子のつどいの広場、養育者代表、事務局として金沢区地域子育て支援拠点、金沢区社会福祉協議会、金沢区役所。 【いきいきフェスタ】ぼたんちゃんこどもエリア健やか子育て連絡会ブース来場者数:1,000人以上 【外遊び応援キャンペーン】 R4年度 エントリー数:82イベント・景品交換数 83個 R5年度 エントリー数:91イベント・景品交換数 133個・参加組数 819組 R6年度 エントリー数:125 イベント・景品交換数:187個・参加者:916組 R7年度 エントリー数:129 イベント・景品交換数:172個・参加者:727組 【子育て応援リーダーによる地域訪問(R7年度より子育て応援リーダー交代)】 R4年度 36件(内訳:地域子育てサロン・コミュニティサロン 22件 ・ 保育園 11件 ・ 地域イベント等 3件) R5年度 69件(内訳:地域子育てサロン・コミュニティサロン 32件 ・ 保育園 21件 ・ 地域イベント等 16件) R6年度 78件(内訳:地域子育てサロン・コミュニティサロン訪問36件・保育園訪問24件・地域イベント等 18件) R7年度 40件 (内訳:地域子育てサロン:21件 ・多世代交流コミュニティサロン訪問:5件 ・保育園訪問:9件 ・地区センター、地域ケアプラザ等:5件) 【地域deとことこ】R4年度 12会場・101回・参加組数 543組、ベイスайдdeとことこ 1回・参加組数 21組 R5年度 13会場・102回・参加組数 558組 R6年度 14会場・105回・参加者数645組 R7年度 14会場・104回・参加者数677組 【地域子育て支援事業アンケート・R5年度】 ・「とことこ」の職員が地域のサロン等に出張してひろばを提供する「地域deとことこ」を知っていますか。 (全体の集計) ①知っており参加したことがある19.3% ②知っておりこれから参加する予定8.2% ③知っているが参加する予定はない29.2% ④知らない141.3% (とことこ利用者の集計) ①知っており参加したことがある31.8% ②知っておりこれから参加する予定10.5% ③知っているが参加する予定はない29.8% ④知らない27.9%				
①【金沢区の子育て支援ネットワーク事務局を担当】 ・健やか子育て連絡会の事務局の中の拠点の役割として研修会、いきいきフェスタ、外遊び応援キャンペーンを開催。関係機関や地域の方々と連携しながら取り組む事で、ネットワークがより強められた。 ・特にR7年度は、区・区社協と共に取り組み「第5期金沢区子育て支援の協働の指針」を策定した。 【親と子のつどいの広場との連携】 ・地域のイベントやいきいきフェスタの準備を協働で行うことで、積極的に親と子のつどいの広場代表者会合の場を設けている。外遊びキャンペーンや「金沢ハっさく(子育て練習室)」開催の周知活動や景品交換、会場提供や保育の協力関係を築いている。また新規参入した親と子のつどいの広場「あしたひろば」と既存の親と子のつどいの広場(4か所)との関係作りを進めた。 ・親と子のつどいの広場と区役所との連絡会開催に向けて、拠点が仲介した。 【子育て応援リーダーを中心としたネットワークの強化】 ・子育て応援リーダーが中心となり、地域の子育て支援関係者・関係機関との関係作りを継続して丁寧に行っている。定期的に地域を訪問することで、各地域の取組を体感し、その様子をブログを通して情報発信することで職員間、地域の親子、地域の支援者に向けての情報共有につながった。地域訪問がきっかけとなり、保育園や地域の子育てイベント運営に携わる機会が増えた。(釜利谷地区「釜利谷すくすくひろば」、六浦地区「むつくんびっく」、あおぞら谷津保育園「あおぞらふれあいまつり」)また、サークル活動から始まった人形劇ぐるーぶ「ら・らんじえ」による拠点ファミリーDAY公演の協力を継続している。 ・特に保育園や多世代コミュニティサロンの訪問を重ねている。保育園とは、相互の講座開催「親子でどろんこ遊び」・「おしっこできるかな」やイベント周知、開催の協力関係ができた。多世代コミュニティサロンとは、拠点について知っていただく事に注力し、関係性を築く中で、乳幼児親子がコミュニティサロンを訪れるきっかけを作っている。 R6年度より、法人間の連携で金沢八景YMCA保育園・マナ保育園と「とことこ」で「レインボーみんなのひろば」を毎月開催している。(参加組数のべ263組)アウトリーチの取り組みと保育園が身近な居場所として地域の親子に定着するよう保育園と協力ができている。 【地域deとことこの効果】 ・職員が地域に出張し、子育て相談の対応や情報提供をさせていただく「出張とことこ(地域deとことこ)」をR4年から定期的に開催。開催地により地域の方の期待や、拠点職員の立ち位置なども様々なため、地域の方々とともに話し合いながら進めている。地域の親子の居場所として定着し、地域のイベントに乳幼児親子の参加が増える等、地域と家庭をつなぐ架け橋となっている。また、「地域deとことこ」に参加した親子が拠点を利用するきっかけになり、双方向の支援となっている。 ②【拠点が地域の入口に】 ・地域のサロン、幼稚園、関係機関などに訪問し、それぞれの特色、雰囲気や参加者の様子などの情報を提供することで、拠点利用者が地域を知るきっかけとなるよう、橋渡しをしている。特に、「地域deとことこ」を通じて親子を地域の子育て支援へとつなげる大切さを職員自身が感じ、積極的な活動につながっている。 ・子育て応援リーダーが地域訪問をした際には、拠点のブログでそれぞれの特色や雰囲気を報告している。地域の様子を詳細に届けることで、地域の親子が地域活動に参加するきっかけとなっている。また、地域の支援者に向けた感謝と活動の意義を届けている。				

評価の理由(区)

①・健やか子育て連絡会の地区別交流会を開催することで、ネットワークを推進させることができた。地区別交流会では、地域の課題を共有し、地区ごとの状況に応じた支援の方向性を、テーマに基づき検討した。また、全体会で出た課題の解決に向けて、支援者・養育者のニーズに合わせた内容の研修が実施できるよう協力した。テーマに応じて、福祉保健課などの関係課と調整し一緒に取り組んだ。

・健やか子育て連絡会において、金沢区内の大学教授等にアドバイザーになっていただき、学術的な観点から地域活動などについてアドバイスをいただいている。また、5年に1回実施している子育て実態調査において、横浜市立大学と共同研究契約を締結した。調査の分析や調査結果を踏まえたアドバイスをいただき、「第5期金沢区子育て支援の協働の指針」を策定した。

・いきいきフェスタでは、健やか子育て連絡会のネットワークを活用し、拠点や主任児童員、保育園と連携し「ぼたんちゃんこどもエリア」を運営することで、地域の子育て支援者の交流の場づくりのきっかけとすることができた。

・「地域deとことこ」事業を始めるにあたり、地域に定着できるように民生委員児童委員協議会に説明し、区事業の一環として運営できるように調整した。また、コロナ禍では商業施設でも「地域deとことこ」が開催できるように調整するなど、「とことこ」と地域のネットワーク形成に寄与した。

・子育て応援リーダーが主導で行っている「金沢ハっさく(子育て練習室)」を通じ、親と子のつどいの広場との連携強化に取り組んだほか、連絡会を開催し意見交換を行った。

②・「金沢ハっさく(子育て練習室)」の講座の場所の提供や広報などについて協力している。

・拠点とともに窓口でのチラシ配布や乳幼児健診での呼びかけなどを通じて子育て世代に地域の子育てサロンや保育園・幼稚園の地域活動の情報提供を行い、利用者が地域と繋がるよう支援した。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・健やか子育て連絡会での役割や関係機関との顔の見える関係作りを継続し、お互いの役割を理解しながら関わるすることができた。
- ・金沢区内の大学と連携し、子育て支援の充実に向けた協力(健やか子育て連絡会アドバイザー、金沢区子育て実態調査の研究、外遊び推奨に向けたプロジェクト等)を仰ぎ、「第5期金沢区子育て支援の協働の指針」を策定した。
- ・子育て応援リーダーの定期的な訪問や「地域deとことこ」を通じ、拠点と地域の方との距離が縮まり、双方向の関係性が確立。親子が地域や拠点につながる存在となっている。

(課題)

- ・地域や関係機関との良い関係性を継続し続けることが大切である。
- ・子育て支援活動に関わりがない方々にも拠点について知っていただくよう取り組む。

振り返りの視点

- ア 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。
- イ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。
- ウ 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、子育て支援分野に限らず、様々な社会資源と連携・協力した取組を実施しているか。
- エ 養育者や子育て支援活動に関心のある人を身近な地域の子育て支援の場や地域の活動につなげているか。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A～D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	・地域子育て支援事業アンケートで、拠点でボランティア募集をしていることを知らない人が92%であり、区事業内や広報等で伝えていきたい。 ・コロナ禍により休止しているひろばボランティア活動に関しては、安心・安全の環境整備を行い、再開にむけての取り組みを行っていく必要がある。 ・子育てサークル数が減少しており、地区別交流会で各子育てサークルの課題を共有し、子育てサークルの継続について共に考えていく必要がある。サークル支援に関しても、現況に合わせた方法を検討していく。 ・拠点を利用し満足している人は、ボランティア活動に「自分の子育てが落ち着いたら参加したい」と回答している人がやや多くなっていることから、まずは拠点を利用してもらい、満足してもらえるよう心掛ける。	A	A
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。		A	A
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		A	A
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		A	A
評価の理由(法人)			
健やか子育て連絡会研修会・講演会】 R4年度「みんなで子育て金沢区～子育てしやすいまちづくりのために～」事例検討 ●講師 久保健太さん ●参加人数 24人 R5年度「金沢区の強みを活かした多世代交流・つながりづくり～ななめの関係って大事！！～」 ●講師 久保健太さん ●参加人数 26人 ※R6年度、R7年度は「かなざわっこを共に育む応援プロジェクト」とコラボで実施 R6年度「こどもがまんなか。たまご(他孫)育てで地域がつながる」 ●講師 ぼうだあきこさん(NPO法人 孫育て・ニッポン 理事長) ●参加人数 38人 「支援者もママも元気になれる5つのポイント」 ●講師 久保健太さん(大妻女子大学 講師) ●参加者41人 R7年度「発達障がいのある子どもたち ～特性と支援～」 ●講師 田沼美穂さん(横浜YMCA/特別支援教育士) ●参加者52人 「アサーションの手法を学び、コミュニケーションUP！」 ●講師 奥田訓子さん(桜美林大学総合研究機構 特任講師) ●参加者17人 【ボランティア活動件数】R4年度 71件 / R5年度 116件 / R6年度 239件 /R7年度 298件 【ボランティア説明会参加人数】R4年度 8人 / R5年度 4人 /R6年度 16人 /R7年度 15人 【学生受入人数】R4年度 54人 / R5年度 82人 /R6年度 69人 /R7年度 74人 【子育てサークル支援】サークルリーダー全体会・とことこサークルWEEK(R5年より開始 3サークル参加 利用43組) サークル数:R4年度 8サークル / R5年度 6サークル / R6年度 6サークル R7年度 4サークル 【プレババ・プレママ教室参加人数】R4年度 222組/ R5年度 226組/R6年度 192組 /R7年度 179組 【地域子育て支援事業アンケート・R5年度】 ・「とことこ」が主催しているイベントでのボランティア活動に参加したいと思いますか。 (全体の集計) ①したいと思う7.1% ②自分の子育てが落ち着いたら考えたい57% ③したいと思わない36% (とことこ利用者の集計) ①したいと思う8.6% ②自分の子育てが落ち着いたら考えたい65% ③したいと思わない26.4%			

①【ボランティア活動の再開・子育て応援ボランティア説明会によるボランティアの入口】 ・コロナ禍でのひろば運営において、ボランティアの方々の安全を守るため、ひろばでのボランティア活動を休止していたが、5類に引き下がったことで再開した。ひろばの見守り、公園サポーター、横浜子育てサポートシステム提供会員の3つの活動を紹介する「子育て応援ボランティア」説明会を毎月開催し、少しずつではあるが、ボランティアの登録につながった。 ・「子育て応援ボランティア」について紹介記事を区報(コラム)に掲載し、説明会参加者増へつながった。 ・市大の学生が公園サポーター対象のアンケート調査を実施し、卒論としてまとめ、公園定例会にて発表の場を設けた。普段の活動が参加者にもたらす効果や自身の役割を再確認する機会となり、ボランティアを継続するモチベーションにつながった。 ・ボランティアの周知に注力したことで、ボランティアの登録・活動件数増につながった。 【「かなざわっこを共に育む応援プロジェクト」の取り組み発動】 ・R6年度より金沢区内で活動する、子育て支援を担う方々の発掘と育成を目的とした「かなざわっこを共に育む応援プロジェクト」として、「健康促進に関する講座」「子育て支援に関するためになる講座」「生活が豊かになるお楽しみ講座」を開催。とことこHPに専用ページを作成し、広く周知をしている。2年間で約301人の参加があった。参加者の満足度も高く、子育て支援の担い手のスキルアップや交流の機会となった。 ・R6年7月に拠点HPに「子育てを応援する皆さんへ」の名称でボランティア特設ページを開設した。拠点のボランティア募集の一助となっている。 【「金沢八っさく(子育て練習室)」講師養成に向けた取組】 ・基本的な養育行動を伝える「金沢八っさく(子育て練習室)」の講師養成講座を開催。とことこ職員、親と子のつどいの広場職員13人が参加し、R6年度からの本格実施に向けた準備が整った。 ・R6年度より「金沢八っさく(子育て練習室)」を開催。養育者向け講座のべ150人参加。地域関係者への紹介講座のべ88人の参加があった。 ②【子育てサークル活動を通じた地域へのつながり】 ・サークル活動を通じて、養育者自身が地域で活躍できるよう応援している。拠点を活用したサークル支援の一環として、『サークルWEEK』を開催した。サークル代表者に拠点利用者全体へのアナウンスと個別の質問に対応していただき、サークル活動に意識を向ける取組となった。また、子育てサークルリーダー交流会で活動の課題を共有し、解決に向けた情報交換をすることで、子育てサークル活動の継続を支援している。 【利用者自身が拠点の活動に参加できる機会の創出】 ・とことこサポーターという形で①通信の折作業や折り紙、来館時の名前シールの準備等の作業、tokotoko handmadeで手作りをしながら参加者との交流・情報交換、とことこ通信へのコメント掲載、②ロコミ情報(病院・離乳食・幼稚園・保育園)の記入、③ゆずりますコーナーの活用、④利用者掲示板への投稿等、利用者が「とことこ」の活動に参加できる機会を設けている。 ・利用者とスタッフの会話から「サポーターズ企画 太極拳」が開催され、参加者同士でサークルを立ち上げることにつながった。 ・職員が利用者からの相談対応の中で、随時先輩ママやパパとして経験を話してもらう機会も創出した。また、卒論や調査研究に関する学生インタビューの依頼が増え、養育者自身が経験を話す機会が増えた。 ・元利用者が高校生になり、カリフォルニアからオンラインを活用した英語での絵本の読み聞かせや遊びを行うイベントを毎月開催している。 ③【地域の担い手に向けた研修・子育て家庭の現状共有】 ・健やか子育て連絡会のテーマに合わせた研修会を開催し、支援者のスキルアップにつながった。 ・健やか子育て連絡会全体会のテーマ「多世代交流・つながりづくり」推進に向け、健やか子育て連絡会全体会で協議をした。地区別交流会では、グループワークを通じて現状の確認、これからつながりたい世代へのアプローチ等について協議を行った。2月の全体会では地区別交流会後、実際にやってみたこと、これからやってみたいことについて協議し、1年を通じてテーマについて深めることができた。これにより、地域で子育て家庭を温かく見守る雰囲気醸成された。 ④【プレパパ・プレママ・学生の支援】 ・プレパパ・プレママ教室を月2回定期的に開催。山本助産院協力のもと、助産師による沐浴指導、妊婦体験、抱っこや着替えの練習を行っている。病院での両親教室がオンラインに移行している中、実際に体験することで産前産後の不安軽減につながる一助となっている。 ・プレママDAYを月に1回開催し、産後のイメージ作りに役立てると共に、妊娠期から繋がりを持ち、心配事を直接お話しただけの機会となっている。 ・コロナが5類に引き下がったタイミングで、時間や人数等の制限を設けなく実習生やボランティアの受け入れを行った。利用者にとってひろばに実習生がいる事が通常の風景となりつつあり、様々な世代同士がふれあえる場となっている。また、卒論や研究の為、学生自身が公園サポーターや利用者からリアルな声を聞く事で、子育てやボランティア活動のイメージづくりの機会となった。 ・土曜日や長期休みを利用し、高校生がボランティアとしてかわる機会が増えた。特に「ゆうがたほっとひろば」は学校帰りに活動できる利点もあり、新たな学生ボランティアのスタイルが確立した。
評価の理由(区)
①・拠点と協力し、健やか子育て連絡会の研修テーマを地域の担い手の方々のスキルアップや意欲向上を目的に設定し、研修会を開催した。 ・拠点が地域の各種会議において子育てサポートシステム提供会員やとことこひろばなどでのボランティア活動について周知できるよう、会議参加の調整を行った。 ・区の保健師が地域の各種会議において、子育て支援に関心を持ってもらうため、金沢区の子育ての現状について共有した。 ・子育てサポートシステム提供会員募集について、広報よこはまで周知を行った。子育てのボランティア募集についても広報よこはまで周知したほか、イオン金沢八景のデジタルサイネージを用いて周知している。 ・「金沢八っさく(子育て練習室)」の講師養成講座について、チラシを子育て支援者に配布するなど周知活動に協力したほか、拠点が幼稚園長・保育園長会議で周知できるよう調整した。 ・「かなざわっこを共に育む応援プロジェクト」の子育てサポーター募集について、保健活動推進員の定例会やいきいきフェスタで周知した。 ②・育児サークルについて、現状を把握し必要な支援を拠点と検討した。 ・令和4～6年度、育児サークル交流会を拠点、子育て支援者と協力して開催し、育児サークルリーダー同士がつながり、活動の幅が広がるよう支援した。 ・サークル代表や養育者が健やか子育て連絡会へ出席できるよう調整し、地域の中でつながりを作り、今後の子育て支援活動につながるきっかけを作ることができた。 ③・地域の支援者などが集まる各種定例会で、区全体と地域ごとの母子保健の状況について伝えている。 ・区民まつり「いきいきフェスタ」では地域全体が子育て家庭を応援していることが伝わるように拠点、区、親と子のつどいの広場、保育園、主任児童委員など子育て関係のブースが連携して「ばたんちゃんこどもエリア」を運営することで、子育て家庭が安心して過ごし、楽しめる工夫をした。また、子育て支援の取組の周知も行った。 ・サークルの減少に伴い、サークル交流会は廃止し、その代替としてのサークル支援の方法の検討を開始した。 ④・妊娠期から拠点や利用できる資源を知ってもらうため、両親教室に拠点職員が参加し、拠点を周知できるよう調整した。 ・看護学生実習、インターンシップや中学生の職業体験などを拠点に受け入れてもらい、学生が子育て家庭とふれあう機会を設けた。 ・プレパパ・プレママ教室を拠点の研修室から区役所で開催できるよう調整し、結果として、区を中心に位置し、駐車場もあるなど利便性の高い場所になったことから、1回あたりの受講人数を増やすことができた。

拠点事業としての成果と課題
(成果) ・コロナが5類に引き下がったタイミングで、ボランティア活動を希望されるシニア世代や、学生のボランティア・実習の受入れも多くなり、自然な形で多世代交流の場になっている。 ・妊娠期からの取り組みは区と共に継続的に行っている。プレパパ・プレママ教室の会場が研修室から区役所に移行した事で、定員増や交通の利便性もあり、参加者増につながった。 ・利用者に対し、ほんの少しの時間、拠点活動を担っていただくことで、受け身ではなく、主体的な関わりに変容する機会となっている。 ・「かなざわっこを共に育む応援プロジェクト」を通じて、地域で子育てを応援する方のスキルアップや交流の場となっている。 ・子どもへのかかわり方や怒鳴らない子育て方法を学ぶ「金沢八っさく(子育て練習室)」を開催。参加者の満足度が高く、子どもへの関わり方のヒントにつながった。 (課題) ・「「かなざわっこを共に育む応援プロジェクト」が子育てのサポーターの新規確保につながるよう、これまで子育て分野と関わりの薄い団体等にも講座への参加を働きかける必要がある。 ・金沢八っさく(子育て練習室)の認知向上として、「まだ情報が届いていない層」へのアプローチを行い、前向きな子育てができる養育者の増加を図る必要がある。 ・育児サークルに対する今後の支援の方向性を検討する。

振り返りの視点 ア 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。かつ新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。 イ 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。 ウ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。 エ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。 オ 活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。 カ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。 キ 子育て家庭(妊娠期の方を含む)を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。 ク これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。
--

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A～D)		
		法人	区	
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	・問題を抱えている家庭の支援について、複数の問題が整理されないまま横浜子育てサポートシステムを紹介されるケースがある。公的支援を受けられない家庭をどう支援していくか協議していく事が課題である。 また、実際にサポートを行っている提供会員が、地域住民として、どの程度の関わりをもつのかも大きな課題である。 ・最初にサポートが必要である状況を区が把握して横浜子育てサポートシステムに依頼する場合、横浜子育てサポートシステムに依頼する内容と区で支援する内容について整理をしたうえで、横浜子育てサポートシステムにつなぐ必要がある。	B	B	
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。		A	A	
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		A	A	
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	A	
評価の理由(法人)				
【活動件数】 R4年度 2,301件/R5年度 3,329件 R6年度 1,412件/R7年度 1,643件※R6年度より新システムに移行のため、統計上の差異あり 【会員数※各年度末人数】 R4年度 利用会員:523人 提供会員:114人 両方会員:22人 合計:659人 R5年度 利用会員:619人 提供会員:117人 両方会員:30人 合計:766人 R6年度 利用会員:524人 提供会員:118人 両方会員:22人 合計:664人 R7年度 利用会員:525人 提供会員:130人 両方会員:26人 合計:681人 【地域子育て支援事業アンケート・R5年度】 ・横浜子育てサポートシステムを利用したことがありますか。 (全体の集計) ①②利用したことがある、今後利用する予定がある13.6% ③利用したことがない86.4% (とことご利用者の集計) ①②利用したことがある、今後利用する予定がある20.4% ③利用したことがない79.6% ・利用したことがない理由は何ですか。 (全体の集計) ①今は利用する必要がある51.3% ②他人に預けるのが不安29.6% ③知らない22.7% ④利用開始までに時間がかかる15.1% ⑤家族の理解が得られない0.4% (とことご利用者の集計) ①今は利用する必要がある52.6% ②他人に預けるのが不安30.3% ③知らない14.5% ④利用開始までに時間がかかる17.5% ⑤家族の理解が得られない0.4% 【援助活動の順位・R5年度】 1位「利用会員宅預かり」882件 2位「幼稚園・保育所等の迎え」320件 3位「地域子育て支援拠点・親と子のつどいの広場等での預かり」296件 4位「習い事・塾の送迎」284件 5位「提供会員宅預かり」245件				
①【区との連携による計画的な周知活動・拠点のネットワークによる個別の呼びかけ】 ・区と連携し、小中学校校長会での周知や広報よこはま金沢区版に横浜子育てサポートシステムの記事掲載を定期的に行っている。 ・とこと研修室以外に、親と子のつどいの広場・地域ケアプラザ、区役所など、様々な会場で入会説明会を開催している。 ・「地域deとことこ」での声掛けから、六浦地区の保健活動推進員と民生委員、計3名が提供会員として登録し、活動している。また、東部地区社協が主催する懇談会(幼稚園・保育園・拠点)の場で、横浜子育てサポートシステムの現状と、提供会員募集についてお伝えした。 ②【養育者に向けたPR・状況に合わせた個別対応】 ・地域の子育てサロン、育児教室など、養育者が集まる場所に職員が出向いた時は、横浜子育てサポートシステムのイメージが描けるよう、必要に応じて実際の利用について説明している。 ・親と子のつどいの広場のスタッフが提供会員となることで、横浜子育てサポートシステムに対する理解が深まった。そこから養育者へ向けて子育てサポートシステムの情報が広がっている。 ・拠点でのひろば預かりの様子を見て、ひろば利用者が利用会員として登録。更に、R5年7月の料金改定・おためし券の導入により、子育てサポートシステムを利用するハードルが下がり、依頼数が急増した。 ・双子の養育者や養育者の心身の不調、「とことこ」から遠方で妊娠中等、事情がある場合には個別に出向いて入会説明会を行った。 ・ひろば預かりの様子をみて、お試し券を使用する依頼が目立っており、利用促進につながっている。 ③【横浜子育てサポートシステム本来の意義を伝え続けることと会員活動を支えるきめ細やかなフォロー】 ・制度の入口である「入会説明会」において、横浜子育てサポートシステムが「地域の支えあい」であることを説明。事前打ち合わせには全てコーディネーターが同席し、提供会員・利用会員双方が不安がないように、細かな事も確認。双方の信頼関係づくりを丁寧に行っている。 ・サポートの依頼があった際には、丁寧な聞き取りから利用会員のニーズをくみ取りながらマッチングを行っている。 ・配慮が必要なサポートが増加傾向にあり、必要時に区へ確認をしている。サポートしている提供会員へ細目に現状を聞き取り必要な場合は調整を行っている。要保護児童対策地域協議会に挙がっている家庭はカンファレンスや日常的に関係機関とも連絡を取り、提供会員に過度な負担がかからないよう配慮している。 ・全会員対象の交流会を定期的に開催している。利用会員にとっては、提供会員と知り合う機会となり、提供会員にとっては、活動の情報交換をする場となっている。 ・R5年7月から始まった報酬の改定等にもとない、提供会員に向け説明会を3回実施。区も同席した。また、R6年4月からリリースされた新システムについて、会員登録更新と概要についての説明会を開催。横浜子育てサポートシステムの制度が大きく変わる中、混乱を最小限に抑えるよう、主に提供会員に向けた丁寧な対応を行っている。 ④【区や関係機関と連携した家族支援】 ・毎月の区との会議で定期的に横浜子育てサポートシステム利用会員の家庭状況を共有し、必要に応じて区が把握している状況をもとにコーディネートを行った。また、継続サポート中の親子の状況についても都度確認をしながらサポートを行っている。 ・横浜子育てパートナーに継続相談している利用会員に対しては、パートナーと情報共有しながら対応するケースもある。また、依頼内容によっては横浜子育てサポートシステム以外の制度を紹介している。(ガイドボランティア・乳幼児一時預かり事業など) ・個別支援学級に通う行き渋りのある児童の送迎に関しては、区の社会福祉職、小学校の児童専任教諭と情報共有し、子育てサポートシステムの役割を確認しながらサポートしている。				

評価の理由(区)
①・区民に対して、母子健康手帳交付面接、両親教室、母子訪問、乳幼児健診、赤ちゃん教室(育児教室)など区が実施している事業や母子保健活動の中で周知している。 ・提供会員数を増やすため、窓口や電話での「子育て支援」に関する問い合わせの際には「提供会員」としての活動があることを説明した。また、広報よこほまにコラム記事「提供会員募集」の掲載を支援した。 ・周知する対象や周知方法を検討し、対象機関と調整した結果、拠点が小中学校校長会、公私合同園長会、幼稚園園長会、地域ケアプラザ等、提供会員の獲得につながりそうな地域や関係機関に対して周知を行うことができた。 ・令和5年度に市民の意見を市政に反映する「デジタルプラットフォーム」に「子育てをサポートする人材の発掘が急務である」という意見が挙げられたことをふまえ、令和6年度に事業化した「かなざわっこを共に育む応援プロジェクト」を通じて横浜子育てサポートシステム含む子育てに関わるボランティアを発掘を進め、子育て支援者定例会や保健活動推進員定例会で子育てサポートシステムの提供会員・両方会員募集の周知を行った。 ②・乳幼児健診の問診、窓口や電話での相談や訪問時に特にニーズがあると思われる対象者に周知したほか、生活支援課やさくらの木(横浜型児童家庭支援センター)からも区民に案内できるよう制度の周知を行った。 ・説明時に個々の養育者の預かりに関するニーズを把握した場合は、拠点に共有した。 ・来所や電話相談時にリフレッシュのニーズがあった場合は、一時保育との違いも含めて横浜子育てサポートシステムを紹介した。 ③・定例会を通して運営上の問題点や課題を共有し改善へ向けて協力した。 ・提供会員が負担に思っている複雑な課題を抱えている子どもへの対応など、区と提供会員との役割分担の見直しやどこまで関わるかなどのアドバイスをを行った。 ・両会員が活動の意義を理解し、良好な関係で利用できるシステムとなるよう、定例会後、地区担当保健師や社会福祉職にフィードバックし、利用会員のフォローに努めた。また、配慮が必要な家庭に関しては、必要時カンファレンスや情報共有会議を実施し、提供会員に過度な負担がかからないよう配慮した。 ・令和5年7月から始まった報酬の改定等に伴い、提供会員向け説明会を区役所で3回実施し、区も同席した。説明会を開催したことで、提供会員からの意見や要望を直接聞く機会となった。 ・フォローアップ研修(緊急救命講習)や会員交流会だけでなく、入会希望者増のニーズにあわせて入会説明会について、開催場所等の面から支援した。 ④・子どもの預かりや送迎等の相談があった場合には、横浜子育てサポートシステムだけでなく、その他の子育て資源の利用も検討したうえで、子育てサポートシステムの制度利用が適当であると判断される家庭に案内をしている。 ・相談共有会議で挙がった家庭について、拠点と情報共有を行い、適切な対応ができるように協力し、必要時課内で共有した。また、活動を通して把握した継続支援が必要な人を区事業や地域の社会資源(一時預かりや保育園入所の情報提供など)につなげた。

拠点事業としての成果と課題
(成果) ・日々のスタッフ会で、ひろば・横浜子育てサポートシステム・横浜子育てパートナーの情報共有を行っていることで、横浜子育てサポートシステムの状況についても職員全員で共有できている。横浜子育てサポートシステムについての理解が深まったことで、ひろば利用者の状況から子育てサポートシステムを紹介するなど、必要な人に情報が届くしくみができている。 ・コーディネーターが事前打ち合わせに全件同席した事と、きめ細かくコーディネートする事で、提供会員・利用会員双方の継続的なサポートにつながった。 ・横浜子育てサポートシステムが支援の入口となった利用会員について、区と情報共有し、家族支援につながっている。特に支援が困難な家庭のサポートに関しては、定例会の場で、区と横浜子育てサポートシステムのそれぞれの見立てを共有し、それぞれの立場から継続的な支援を行っている。 ・子育てパートナーと横浜子育てサポートシステムが連携しているケースもあり、拠点ならではのワンストップの支援となっている。 (課題) ・サポートの依頼急増に伴い、サポートする側の提供・両方会員を増やしていくことが急務である。 ・気軽さと並行して、ベビーシッターと勘違いされているような依頼や、送迎サポートありきの習い事など、「地域の預け預かり合い」の促進という本来の目的を逸脱している依頼が目立っている。子育てサポートシステムの意義を丁寧に伝え続けていくことが必須である。 ・配慮が必要なご家庭のサポートについて、提供会員に過度な負担がかからないよう、区と確認しながら事務局が間に入り、提供会員をサポートしていくことが必要である。

振り返りの視点
ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。 イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。 ウ 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を含め、利用したい人が利用に結びつくための工夫をしているか。 エ 会員が相互の合意のもとに安心安全な活動できるよう、丁寧なコーディネートができているか。 オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や追加のフォロー等を行っているか。 カ 活動における事故防止のための講習、個人情報取扱いに関する注意喚起など、会員への安全対策をはかっているか。 キ 提供・両方会員が安心・安全な活動を継続して行えるよう研修会等の取組がなされているか。 ク 会員が活動の意義を感じられ、会員間の親睦を深め信頼関係の構築のため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。 ケ 援助活動の調整時や会員の声から把握した子育てのニーズを地域子育て支援拠点としての事業に活かしているか(新たな事業の実施や事業の見直しなど) コ 利用相談の内容に応じて、子育てサポートシステム以外のサービス等の情報提供や関係機関に適切につないでいるか。 サ 専門対応が必要と考えられる相談については、専門機関に適切につないでいるか。

7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A～D)	
		法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	・横浜子育てパートナーの認知度は上がってきているが、横浜子育てパートナーを知っている人の割合が、拠点の利用者アンケートでは43%、区実施アンケートでは24%であり、今後も周知が必要である。 ・今までの顔の見える関係から次のステップとして、利用者支援事業について、横浜子育てパートナーが直接出向いて周知するだけではなく、地域や関係機関の方から正確に紹介してもらえるようなネットワークが必要。 ・ネットワークで知り得た情報を横浜子育てパートナーだけでなく、拠点職員から利用者に正確に伝えてもらえるような、共有の工夫をする必要がある。	B	B
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。		A	A
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。		A	A
評価の理由(法人)			
【見学・訪問】金沢区内幼稚園(13園)、認可外保育施設(ぴーまん保育園能見台・あけぼの保育園・BeeKidsClub金沢文庫園) 【広報周知活動】育児教室、両親教室 【拠点活動】 プレパパ・プレママ教室、とことこパパDAY、ピアサポート(発達に不安なママたちで話しましょう、個別支援学級に通う親同士で話しましょう、食物アレルギーについて話しましょう、HSC・HSPの会)はじめてして幼稚園 【出張相談】 親と子のつどいの広場5会場にて定期的実施(たんぽぽ・ふきのとう・おりーぶ・ままのわ・あしたひろば)、よりみちガーデン 【ネットワーク】 健やか子育て連絡会事務局・発達支援つながりワーク「てくてく」事務局、金沢区民まつり(いきいきフェスタ)ブース運営、こども食堂・地域食堂訪問、みんなのレストランスタッフミーティング 【その他】公認心理師養成校 実習生への対応(実習指導・評価) つどいのひろばCブロック研修講師 【相談件数の推移】 R4年度 394 件/R5年度 368 件/ R6年度 265件/R7年度 255件※R6年度より新システムに移行のため、統計上の差異あり ●相談のきっかけ⇒1位「相談継続」 2位「拠点内巡回」 【地域子育て支援事業アンケート・R5年度】 ・横浜子育てパートナーに相談したことがありますか。 (全体の集計) ①相談したことがある6.7% ②相談したいがまだ相談したことがない7% ③相談のしかたがわからない15.1% ④何を相談していいかわからない10.3% ⑤相談する必要を感じていない60.9% (とことこ利用者の集計) ①相談したことがある10.4% ②相談したいがまだ相談したことがない7% ③相談のしかたがわからない17.1% ④何を相談していいかわからない9.7% ⑤相談する必要を感じていない55.9%			

①【あらゆる機会や媒体を活用した周知】【関係機関へ向けた利用者支援事業の理解促進】

- ・「横浜子育てパートナー」専用ちらしを活用し、拠点新規利用者、横浜子育てサポートシステム入会説明会、育児教室、両親教室、プレパパ・プレママ教室、地域のサロン訪問等に拠点職員が出向いた際に周知に努めている。また、とことこ通信に横浜子育てパートナーの紹介と出張相談の日時について掲載し、HPとともに周知をしている。地道な周知活動の結果、拠点での認知度も上がった。
- ・関係機関の会議にて利用者支援事業の業務の説明をしたり、業務に基づいた発言をし、理解を深めていただけるよう努めている。

②【なにげない相談対応】

- ・「子育てパートナー」の存在を際立たせないスタイルで、ひろば巡回や地域訪問を行っている。日常的な会話の中から利用者のニーズを把握し、自然な流れで相談対応につながっている。
- ・相談者が来訪した際、「とことこサポーター」の活動として手作業を一緒にしながら相談対応を行っている。

【相談者の状況に応じた丁寧な相談対応】

- ・利用者の不安や悩みを聴きながら、ニーズの把握に努めた。継続相談となっている相談者のニーズは、相談者の置かれた状況・心情の変化とともに変わっていくが、各段階で必要な支援につなぐことができるように、利用者自身の力を信じ、寄り添いの姿勢で対応した。

【パートナー、ひろば職員それぞれの役割を確認しながら継続支援】

- ・日々の振り返りで、パートナー相談の内容の中でひろば職員が支援をするにあたり必要な情報を共有し、利用者の状況を伝え、協力体制をとりながら、継続的な見守りを行っている。予約が入っている方に関しては、朝のミーティングで職員に情報共有し、体制を整えて対応している。

【関係機関との迅速な情報共有】

- ・毎月の定例会議で横浜子育てパートナー案件を区に報告。対応についても共有している。緊急性の高いケースは直接地区担当保健師につないでいる。
- ・保健師はもとより、地域や関係機関との顔の見える関係を構築した事で、相談者を必要な支援に迅速につなぐことができた。

③【相談者のニーズに合わせ、計画性をもった地域訪問】

- ・相談者と関わる中で把握したニーズをもとに、地域や関係機関との継続的なつながりを保持。親と子のつどいの広場5か所に定期的に出張相談を実施し、ひろば利用者への相談対応と同時に、ひろば職員への情報提供や気になるケースの相談共有を行うことにより、関係性が密となり、効果的な支援につながっている。また、こども家庭支援センターさくらの木との連携で、継続的な養育者支援につなげている。

【語り合いの会を担当することによる利用者支援の拡充】

- ・拠点で行われている語り合いの会を担当することにより、ピアサポートからニーズのくみ取り、パートナーからの情報提供、相談者のつなぎ先資源として利用者支援の拡充を図った。

【相談内容に応じた地域資源の開拓とネットワークの構築】

- ・健やか子育て連絡会の事務局を担うことで地域の支援者との意見交換、情報提供などの一役を担っている。
- ・保育・教育コンシェルジュ職員との連携により、乳幼児一時預かり事業をおこなっている事業所を訪問し、新たな関係性を築くことができた。
- ・横浜南部児童相談所が行っている里親養育懇談会に出席、金沢区内の子育て情報を提供した。

【発達に不安のある親子を支えるネットワーク】

- ・金沢区内でお子さんの発達に不安をかかえた家族を支えるネットワーク(発達支援つながりワーク「てくてく」)の事務局を基幹相談支援センターとともに担っている。各団体の活動状況を集約したリーフレットを関係機関及び金沢区内小学校新入学生、個別支援学級在籍児童に配布している。また、会合を通じ団体同士の関係性を深めることができている。南部療育センターのソーシャルワーカーとの関係から、利用者からの相談に迅速に対応している。

【ひとり親・貧困世帯への取り組み】

- ・子ども食堂・地域食堂連絡会に出席。金沢区社会福祉協議会を通じて地域で活動している団体との関係構築をスタートさせた。
- ・R6年4月からひとり親・ワンオペ育児の保護者に向けた居場所作りの取り組みとして、拠点閉館後の17:30から19:30に「ゆうがたほっとひろば」を第4金曜日に開催。参加者は延べ109組(大人109人・子ども207人)となった。おむつバンクを同時開催し必要な方にオムツを手渡しすると同時に区社協から提供された物資を配ることで食支援も行うことができた。

特におむつバンクは、とことこ利用者だけでなく、関係機関・保育園・幼稚園、地域の方からも寄付をいただくなど、支援の輪がひろがっており、必要な方に配布することができている。

【公認心理士をめざす学生の実習受け入れ】

- ・R4年～桜美林大学リベラルアーツ学群の実習生受け入れをおこなっている。個別相談、多職種連携・地域連携について、利用者支援事業の立場から現場実習をおこなっている。(毎年2名)

評価の理由(区)

①・主任児童委員の会議や赤ちゃん教室(育児教室)に横浜子育てパートナーや拠点職員が周知のために参加できるよう調整を行った。

- ・母子健康手帳交付時やこんにちは赤ちゃん訪問時に横浜子育てパートナーのチラシを配布したほか、個別の相談や乳幼児健診などにおいて拠点の外(「地域deとことこ」など)でも拠点スタッフと相談できる場があることを周知した。また、拠点から離れた地域の方にも電話での相談を周知したことで、幅広い地域の方が拠点の相談機能を利用出来るよう働きかけた。
- ・キラキラMAPや広報よこはまの特集でも拠点の機能の一つとしての利用者支援事業を周知した。

②・毎月の相談共有会議で、対象者について役割分担を確認しながら支援できるよう助言し、専門機関へのつなぎや継続支援について必要時対応した。また、複雑な状況や課題があるケース、緊急性が高いケース、横浜子育てパートナーが対応相談や支援の必要性を感じたケースについては、定例会を待たず、都度区に連絡をもらい、地区担当が迅速に相談に応じ、緊急支援を行った。

- ・拠点の相談の範疇を超えた相談者への対応時(特に精神疾患のある養育者や虐待ケース)など、拠点が対応に困る部分に関しては区の専門性を活かしてその都度助言や支援を行い、横浜子育てパートナーが安心して対象者への対応ができるよう、相談や役割分担をしながらも対象者を支援した。横浜子育てパートナーとは随時連絡を取り合い、情報共有や対応の検討、役割分担の再確認をしながら支援を進めた。

③・健やか子育て連絡会や金沢区障害者地域自立支援協議会児童部会、要保護児童対策地域協議会に横浜子育てパートナーが参加し、関係機関とつながりを強化できるよう支援した。

- ・発達支援つながりワーク「てくてく」の研修や運営方針検討の会議出席し、活動が充実していくよう支援した。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・区や関係機関との連携体制の構築により、相談者を必要時に関係機関につなぐことができた。
- ・相談内容に応じた必要な支援先(子の発達・一時預かり)との新たな関係性が構築できた。
- ・職員間でひろば職員と横浜子育てパートナーとの役割を再確認したことで、ひろば相談から横浜子育てパートナーへのつなぎやその後の継続的な見守りがスムーズに対応できた。
- ・関係機関や地域の方に横浜子育てパートナーの役割についての理解を得られたことで、幼稚園園長会での質疑応答や地域に出向いた際に、地域の方から気になる親子についての相談を受ける頻度が高まった。また、区内5か所の親と子のつどいの広場への定期的訪問・出張相談をきっかけにつどいの広場研修の講師の依頼を受け研修を実施した。パートナー連絡会では、金沢区のこども食堂とパートナーの連携についての事例提供を行った。
- ・近隣区の拠点、親と子のつどいの広場や訪問でつながった子ども食堂から気になる親子として相談を受けたケース(虐待ケース)について区に共有した。また、その後の親子の見守りも連携して行っている。
- ・横浜子育てパートナー自身の自己研鑽のために「ひろば全協主催の全国子育てひろば実践交流セミナー」に参加。全国の利用者支援事業について学びを深め、相談者対応に活かしている。
- ・通常の拠点開館時間での利用が困難な親子が相談・情報につながるきっかけとなるような取り組みをパートナーが中心となりおこなっている。特に、ひとり親・ワンオペ育児の保護者を対象にした「ゆうがたほっとひろば」は、多子世帯の親子の居場所として定着した。同時に、フードパントリーやおむつを必要とする家庭へ届けるおむつバンクを開催し、誰ひとり取り残さないことを大切に生活支援につながる取り組みとなっている。

(課題)

- ・養育者と子それぞれに対する並行支援が必要なケース、他自治体(実家が金沢区で祖母からの相談)に居住している方の電話相談等、つなぎ先に苦慮する困難ケースが増加している。
- ・小学生の親(発達・不登校)からの相談も増加傾向にある中、学齢期の相談対応について区と確認していく必要性を感じる。

振り返りの視点

ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。

イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。

ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。

エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。

オ 拠点内でパートナーの役割を理解し、日頃から相談者を拠点内でつなぎ合うことについて、お互いの役割分担を明確にしたうえで、相談対応・利用支援を行っているか。相談者の相談内容に応じて継続対応やつなぎ必要性を判断し、対応しているか。

カ 専門的な対応を要する相談に対して、相談内容と相談者のニーズを踏まえ、速やかに関係機関への紹介・仲介・支援依頼を行うなど、適切な対応をとっているか。

キ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら、フォローをしているか。

ク 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点で振り返りや検討を行っているか。

ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。

コ 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。

サ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整、提案や新たな創出につなげているか。